

平成 30 年度 校内研究のまとめ

学校名 : 日南市立細田中学校

1. 研究主題・副題

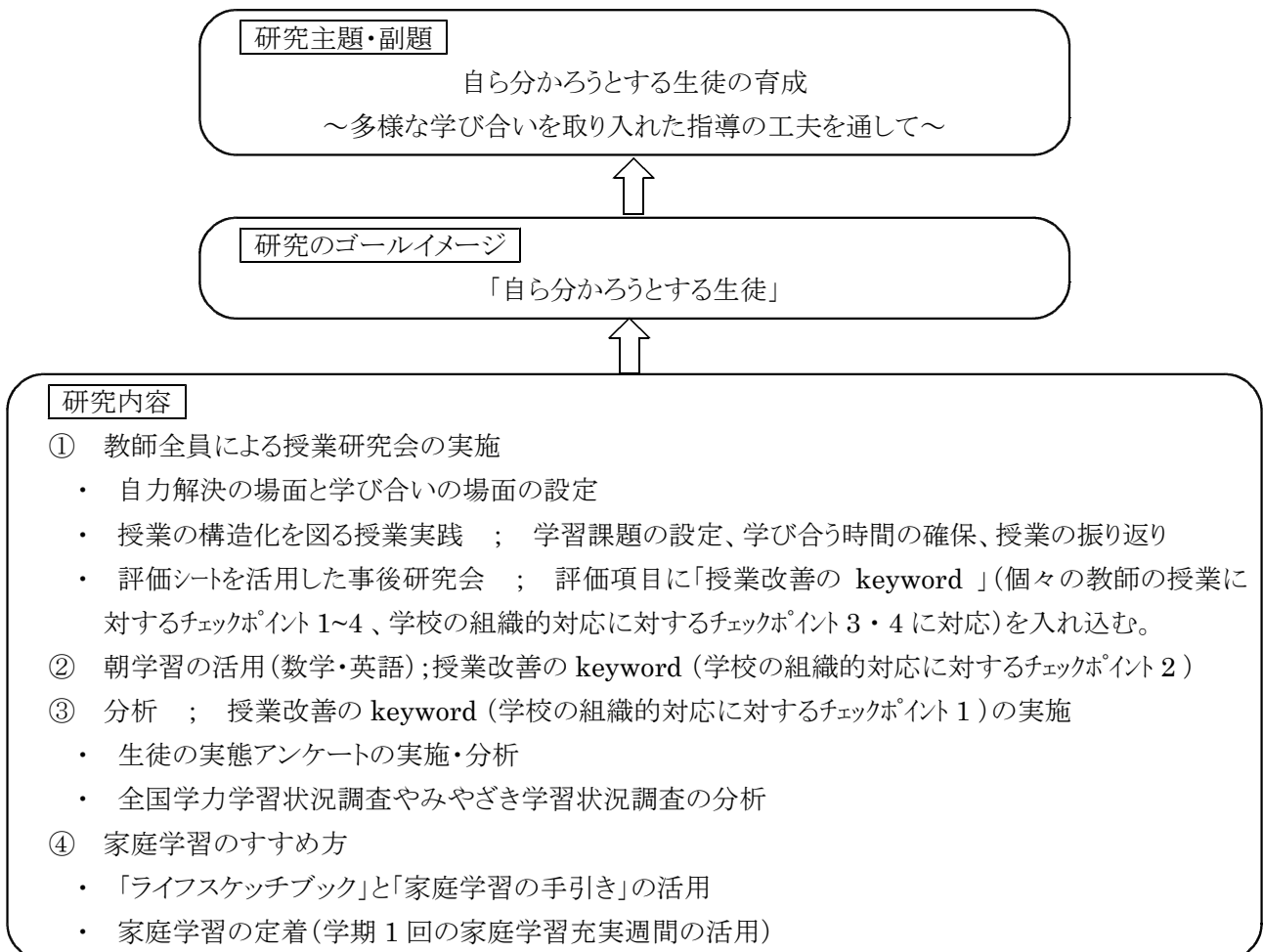
自ら分かろうとする生徒の育成
～多様な学び合いを取り入れた指導の工夫を通して～

2. 主題設定の理由

昨年度の校内研究の成果として、自力解決に基づく学び合いにおいて、友だちから知識や技能、考え方や価値観を学ぶ姿が見られたり、学習内容の理解を深め、自分の考えに自信をもつ機会になったりしたといった意見が挙がった。一方、課題として、何を達成させるための学び合いなのか、どの場面で設定していくのか等、教師がそれぞれ工夫して実践していく必要があることや、学力差に関わりなく積極的に学び合いとなるような自力解決の場面の確保や、学び合いの場面でのルール決め等、教科共通の理解の上で実践していく必要があることが挙げられた。

そこで、昨年度の研究及び生徒の実態を踏まえ、継続して「学力向上」に関することを実施していくこととした。中でも、「言語活動を充実させるための学習指導法の工夫・改善」を中心に据えて、教科の特質を生かした多様な学び合いを取り入れた指導の工夫を図り、互に関わり、認め合う雰囲気を醸成していけば、生徒は自信を高め、理解が深まり、学習意欲の向上につながると考えた。

3. 研究の全体構想



4. 研究の実際

①教師全員による授業研究会の実施

教科	数学科	理科	社会科	英語科	国語科	学活(性教育)	保健体育科 (体育理論)
担当者	永野	矢野	岩倉	宮下	小林	有村・永野	山下
実施日	H30.9.28	H30.11.27	H30.11.28	H30.12.12	H30.12.14	H31.1.30	H31.2.1

*全ての教科で研究授業を実施するとともに、参観者は9つの評価項目において5段階評価を行い、付箋紙に良い点・改善点・その他について授業者の視点を元に意見を記入した。事後研修では授業者が反省を行った後、持ち寄った評価シート及び記入した付箋紙を使って、拡大印刷した学習過程に貼り付けながら3つの項目について意見を意見を出し合い、授業者にフィードバックした。



<英語科>

<国語科>

<保健体育科>

②朝学習の活用

月～木の8:00～8:15に、読書・数学・英語をそれぞれ4回連続でローテーションで実施する。

内容；各学年で不足している基礎的・基本的な内容を、教科担任が内容を精選する。

形態；自力で問題を解く → 周囲の生徒と答えや解法について話し合う → 解答・解説・やり直し
(それぞれ約5分ずつ設定)

その他；教科担任が内容を精選し、学年担当の副担任が印刷する。

各学年の学習委員会を中心にタイマーを用いて実施するとともに、学年担当どちらかが教室に残り、生徒の様子を見守る。

③分析

国語や数学、理科では、学習形態は表現の多様性を求め、グループを好む生徒が多い傾向にある。一斉授業よりもペアやグループで行うことにより、理解できていない内容を気軽に聞き合ったり、教え合ったりすることができるため、情意面で負担を感じないことが学ぶ意欲にもつながり、満足感や充実感を味わう生徒が多かった。グループでもなかなか意見の出ない課題などの時は、一斉で課題を解決しようと考えている生徒もいたり、一人でじっくり考えたい生徒もいた。そこで、自分で考える時間を確保した上で、目的をもってグループ活動を取り入れること、一斉でしっかりまとめるということを心がける必要がある。

社会や保健体育では、一斉授業に達成感を味わう生徒が多かった。意見発表がしやすく、多様な意見に触れることで自分の思考の幅を広げたり、共に学習を進める過程で課題を見つけたり解決したりできるようである。そうすることで、客観的に自分をみることができると感じている生徒もいるため、個人より一斉やグループでの学習が向いているようである。加えて、教師の説明や解説が生徒の思考を深め、理解の手助けになっているようである。ペア活動を望む生徒もいるので、単元や学習課題に応じて学習形態を工夫していく必要がある。

英語では、1・2年生ではグループでの学習形態にすると分かりやすいと感じている生徒が多く、3年生では一斉授業の形態が他の生徒の意見を聞きながら考えることができ、教師の説明や解説で理解の一助となっているようである。また、語学習得の特性から、グループやペア活動を通して言語運用能力や理解力を身に付けたい、と生徒は望んでいるようである。

④ 家庭学習のすすめ方

家庭学習の手引きを年度初めの家庭訪問で配付し、家庭学習の取り組み方について生徒・保護者との共通理解を図る。

毎週末、ライフスケッチブックに来週の就業時予定を書き込み、教科連絡を記入したり、生徒自らが自分のスケジュール管理を行えるようにする。

家庭学習の定着を図るために、学期に 1 回、家庭学習充実週間を設定し、教科担任による宅習内容のチェック・アドバイスをし、学習文化委員会と連携して手本となる宅習の掲示を行う。

5. 研究の成果と課題

①教師全員による授業研究会の実施

- 個人で考える場面とペアやグループなど集団で考える場面の時間を設定することで、生徒が互いから学ぶ姿勢を身に付け、「学び合い」が活発になったり、学習内容の理解を深めたりするだけでなく、人間関係の醸成にもつながった。
- 発展的な問題を扱う際には 3 ～ 4 人のグループでの学習形態を取り入れるようにしたことで、意見が出しやすく全員が参加できて有効だった。
- 発展的な問題では「書く」ことを意識させた問題を作成し、他の意見を参考に考えをまとめたり、文章にまとめる作業ができた。
- 各教科において、活動だけでなく、生徒自らが課題に向き合う指導が展開された。
- 県の「授業のチェックポイント 4 + 4」の視点を達成できるような授業の展開がなされ、一人ひとりの授業を参観できた点で良かった。
- 一人ひとりが目的をもって対話的な場面に臨めるようにしたり、学年によっては「学び合い」が分からないところを「教え合う」場になっていたようなので、今後は「深い学び合い」にするための課題提示の工夫が必要である。
- 一斉学習の場面が多く、話し合い活動や教え合いの時間が不足しがちだった。
- 「深い学び」になるためには、基礎的・基本的な内容の定着が必要なので、習熟や個別指導の時間確保を指導過程の中に位置づけていく必要がある。
- 「主体的」に取り組む生徒の育成に努めていく必要がある。
- 意欲を高める学習課題を設定する必要がある。

②朝学習の活用

- 読書活動、NIE 活動をつなげながら授業を進めることができた。
- 2 教科だけでなく、他教科の実施も考慮してよいのではないだろうか。

③アンケート分析

- アンケート実施により「主体的で、対話的な深い学び」の三つの視点で考えることができた。
- 細部にわたって実施することができた。
- アンケートの質問内容の精選を図る必要がある

* 全国学力やみやぎ学習状況調査の結果分析については中間報告の際に報告済み

④家庭学習の進め方

- 家庭学習の改善を目的とした教科担任が行い、アドバイスする「宅習点検」は生徒にとっても有効であった。
- 宅習は学年や時期によって家庭学習の方法を見直し、生徒が自主的に学習できるようにする。
- 家庭学習の手引きの活用については、今後検討していく必要がある。

その他

- 学習計画表を用いることで既習事項を振り返ったり、本時の学習内容をまとめたり、次時の学習内容をイメージすることで主体的に学ぶ姿が見られた。